災害看護支援ナース活動報告

報告者　：加藤ゆかり
所属施設：五泉訪問看護ステーション
報告月日：令和６年２月５日

活動日	令和６年１月 30 日（火）～2 月 2 日（金）
活動場所	いしかわ総合スポーツセンター　メインアリーナ
活動内容	メインアリーナにてブロック担当 ・頭痛者の対応 ・転倒、転落者のＶ/Ｓ、状態観察 ・内服確認、介助、点眼介助 ・内服自己管理評価、カレンダー管理の服薬確認、内服管理困難者へ薬剤師に依頼 ・コロナ陽性者、同テント者Ｖ/Ｓ、状態観察 ・発熱者、Ｖ/Ｓ、状態観察 ・食事摂取の確認、排便状況、 ・退所希望者の対応 ・外泊者の確認 1/30（火）16：30～1/31（水）9：00 2/1（木）8：30～17：00　　2/2（金）8：30～15：00
所感	災害から約一カ月経過。高齢者がほとんど。特養に入所されていた方、一人暮らしの方、若い方は別の避難所に行き仕事をされている様子。一部施設のような印象。個々のテントがプライベート空間、生活の場であることを忘れないように活動した。 様々な職種のスタッフが揃っていた。ビブスを着用していたため役割が一目でわかった。 支援期間が三泊四日の為、どのように引き継ぎをしたらいいのか、改めて継続看護の必要性を感じた。送迎のバスの時間が決まっているため、時間内に業務が終わるようにスケジュール管理に務めた。 他の職種の方と何かあれば直接報告し合ってはいたが、情報共有が少なくお互いに分からないことが多かったように感じた。 担当の方がいつの間にか退所したり、外泊が延長したりした。 確認に時間を要した。貴重な体験をさせて頂き感謝します。

災害支援ナース活動報告書

報 告 者：堀川　美津枝
所属施設：新潟県立吉田病院
報告月日：令和　6 年　2 月 12 日

活 動 日	1 月 30 日（火）　～　　2 月 1 日（木）
活動場所	施設名　いしかわ総合スポーツセンター

活動内容		
1/30(火)夜勤：ﾒｲﾝｱﾘｰﾅ、D ﾘｰﾀﾞｰ 11:40　いしかわ総合ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ着 12:30　ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ 13:30　仮眠 16:20　夜勤ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ 16:30～夜勤 1/31(水)9:00 まで 16:30　申し送り 要観察者のﾊﾞｲﾀﾙ測定 ｺﾛﾅ陽性者と同ﾃﾝﾄ内利用者 保健師から頭痛訴える利用者の観察依頼あり、ﾊﾞｲﾀﾙ症状観察 18:00　転倒者あり、ﾊﾞｲﾀﾙ症状観察の結果、外観上問題なく、立位歩行可の為、経過観察となる→明日ﾍﾞｯﾄをﾌﾚｰﾑﾍﾞｯﾄにする事を申し送る。 18:30　配薬服薬確認 19:00　本日発熱で入所した者のﾊﾞｲﾀﾙ、症状観察→ｺﾛﾅ後だが呼吸器症状なし。右下肢の熱感腫脹強い。明日診察予定となる。 22:00　消灯。眠前薬確認 22:45　転倒者あり。外傷なく歩行可 1/31(水)6:30～8:30　食事、内服確認、申し送り	2/1(木)日勤　ﾒｲﾝｱﾘｰﾅ、D ﾘｰﾀﾞｰ 8:30　全体ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ 8:40　申し送り ・処方薬の残数確認→保管場所の統一がなく、個人のﾊﾞｯｸに保有している人もいて、確認に時間がかかる。ｶﾚﾝﾀﾞｰ管理困難者の管理方法検討→保健師と情報共有、薬剤師にも依頼しｶﾚﾝﾀﾞｰの再ｾｯﾄをする。 ・食事量と排便の有無を確認し、排便ｺﾝﾄﾛｰﾙのｱｾｽﾒﾝﾄ、下剤投与を申し送る。 14:00　発熱者、要観察者のﾊﾞｲﾀﾙ測定、症状確認。 16:00　ﾜｰｸｼｰﾄのﾊﾟｿｺﾝ入力 16:30　申し送り 17:00　終了	2/2(金)日勤　ﾒｲﾝｱﾘｰﾅ、D ﾘｰﾀﾞｰ 8:30　全体ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ 8:40　申し送り ・車中泊 18 日の利用者が外出希望あり 状態観察後手続き依頼する。 ・退所希望者の手続き、相談 ・保健師と要観察者の情報共有 14:00　新支援ナースへのｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ 14:30　申し送り 15:00　終了

所　感

・指示命令系統―全体のｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ後統括ﾘｰﾀﾞｰ、県ﾘｰﾀﾞｰ、日勤ﾘｰﾀﾞｰ、夜勤ﾘｰﾀﾞｰを決定し、活動に必要なﾁｰﾑﾋﾞﾙﾃﾞｨﾝｸﾞを形成し進めることができた。

・初めて一緒に仕事をするﾒﾝﾊﾞｰでの支援活動であったが、共通の目標があるため、良好なｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝが図れた事に安心できﾓﾁﾍﾞｰｼｮﾝを高く保持できた 5 日間でした。

・多職種連携－DMAT、JRAT、JWAT、保健師、薬剤師、介護ﾁｰﾑ等と連携する必要性を認識しました。薬剤管理について、保管場所、投与方法、確認について情報共有と統一を図ることに時間を要しました。

・感染管理－PPE は整備されていました。必要数が多く、感染予防策と感染ｱｾｽﾒﾝﾄ環境衛生の継続が必要です。高齢者と認知症の方への留意必要。

新潟県看護協会　e-mail： saigai-shien@niigata-kango.com

災害支援ナース活動報告書

報 告 者：橋本　樹
所属施設：新潟大学医歯学総合病院
報告月日：令和６年２月 14 日

活 動 日	令和６年２月２日（金）　～　２月５日（月）
活動場所	施設名　いしかわ総合スポーツセンター

活動内容

私たちは発災約 1 か月が経過し、避難所の整備が比較的されている「いしかわ総合スポーツセンター」にて活動を行った。この避難所は 1.5 次避難所とされ、高齢者や乳幼児のいる家族、障害者の方々が 2 次避難所へ移動するまでの間生活される場として利用されていた。避難所は大きく 3 つのエリアに分類されており、避難者の自立度が高い順番から、「メインアリーナ」、「サブアリーナ」、「マルチアリーナ」と分類されていた。私たち災害支援ナースは主に「メインアリーナ」の活動を任されており、私は活動初日より夜勤を担当した。

夜勤はエリアを 4 つの区画を各県で割り振り巡回を行った。避難者の中にはベッドからの転倒転落をされている方や、発熱、消化器症状など感染症疑いの利用者が多く、エリアマップに分かりやすく表示されていたため、避難者の健康観察や健康相談などを主に行った。日勤よりもらった申し送り内容をもとに巡回したが、エリアマップや避難者のリストと実際のフロアの状態との相互性があり、現在のエリアの状態を更新する目的で巡回を行い、担当エリアの避難者一人一人へ体調不良の有無などについて声掛けを行った。また、昼夜を通し徘徊される避難者もおり、避難所からの離院などが起きないように一緒に散歩や傾聴をおこなった。

活動 3、4 日目は「サブアリーナ」での活動を実施した。このエリアは主に DMAT の管轄エリアであったが、今後 DMAT が撤収していく中で管轄主体をどの職種に引き継ぐのかが課題となっていた。また、このエリアでも感染症疑いの避難者が多く介助量も高いため、より綿密な健康観察を要する方が多くいた。私は感染エリアのバイタル測定や避難所からの退所、病院から避難所への入所の対応などを行った。活動最終日に次の班への申し送りの際は、現在のサブアリーナの課題や今後 DMAT から災害支援ナースに引き継がれる可能性のある業務内容などを伝え活動を終了した。

所　感

発災から約 1 か月が経過してからの活動であったため、サブアリーナのように管轄主体が変更になる狭間の活動となり、各職種で業務内容を割り振る際にこの避難所の在り方をどのように考えていくのかが課題となった。限られた活動期間の中で災害支援ナースとして移行できる業務内容を決定し次の班へ引き継ぐことは困難であり、自分たちで全てを整理し引き継ぐのではなく、災害支援ナースのチームとして活動することの大切さを実感した。また、避難所が皆様の生活の場であるが、活動の際は「病院勤務の時はどうしているか」という思考へ変換されがちであり、支援しなくてはという気持ちから必要以上に避難者へ声掛けなどを行ってしまった場面もあり、自身の求められている立場をわきまえて活動することの困難さも実感した。

災害支援ナース活動報告書

報 告 者：石見勝志
所属施設：佐渡市立両津病院
報告月日：令和　６年２月１９日

活 動 日	２月２日（金）　～　２月５日（月）
活動場所	施設名　石川総合スポーツセンター（１．５次避難所）

活動内容
２月２日～２月３日（２交代夜勤）
２月４日（日勤）
２月５日（日勤）

●メインアリーナ（２月２日～３日※２交代夜勤）
環境整備。バイタル測定。発熱・下痢・嘔吐などを伴う避難者様への対応。徘徊者・不穏者への付き添い。メンタルケア。服薬管理。ＤＶＴの予防。転倒患者様の状態観察。避難者の所在や状態をホワイトボードに記載。状態変化やベッド移動（テント移動）状況を確認し、ＰＣ入力。ホワイトボードとの相違がないか確認・修正。業務や避難者の状態申し送り。

●サブアリーナ（２月４日・５日※日勤）
上記活動に加え、入所避難者のアナムネ聴取・退所時の確認。感染症エリア（COVID-19、ノロウイルス疑い）のバイタル測定・状態観察。ＤＭＡＴ撤退方針の為、今後の業務をＤＭＡＴ、災害支援ナース、介護員などを中心に相談。次クールの災害支援ナースへ業務内容・課題（提案を含め）申し送り。

所　感
　入所避難者は能登半島の方が多く、避難者様より「必ず、またいつか能登へ帰りたい。」という言葉が多く聞かれた。その思いに寄りそうと共に、その為に今自分にできることは何かを、避難者個々の状態をアセスメントし、場面に応じたケアを提供できるように心がけた。
　１．５次避難所は今回の震災で初めて開設されたこともあり。その運営や活動のあり方も日々変動し、困惑することもあったが、多職種で建設的に意見を出し合い連携、業務調整ができていたと考える。
　平時とは明らかに異なる環境中で、体調を崩してしまう支援者もいた。避難者の支援と同様に自分たちの、安全・健康を維持し活動を継続していくことが重要であると感じた。

災害支援ナース活動報告書

報 告 者：小林雄一
所属施設：新潟臨港病院
報告月日：令和　6 年　2 月 20 日

活 動 日	2 月　5 日（　月　）　～　2 月　8 日（　木　）
活動場所	施設名　いしかわ総合スポーツセンター

活動内容

2/5～2/6 夜勤業務　16:30 日勤担当者からの申し送り、情報収集
17:00 バイタル測定、健康状態観察、徘徊者の対応
19:00 内服管理指導、内服介助、看護師窓口で相談対応
21:00 眠前薬内服確認、内服介助
23:00 巡視、看護師窓口で相談対応　　（2:00～6:00 仮眠休憩）
7:00　内服確認、内服介助
8:00～9:00　巡回、バイタル測定、日勤者に申し送り

2/7、2/8　日勤業務　8:30 全体ミーティング、夜勤者からの申し送り、情報収集
9:00 内服処方依頼処理、窓口相談対応、応急薬対応、保健師と情報交換
11:00～12:00 昼休憩
13:00 内服確認、内服介助
14:00 窓口相談対応、コロナ感染者対応、勤務手順更新
16:00 夜勤者に申し送り

・転倒転落のリスクが高い利用者を介護士チームに情報提供と介助介入の相談。テントの内や入り口に足が引っかからないように調整と工夫。
・震災以降自分が生きているのか死んでいるのか分からない非現実感と不安を窓口に相談しに来た方を、保健師を通して DPAT に介入依頼。訪問日程調整。
・皮膚の乾燥で痒みや痛みを訴える方に保湿剤の塗布介助と使用方の指導。

所　感

被災地の看護職員の負担を軽減し支えるとともに、被災者の健康レベルを維持できるように、適切な医療・看護を提供する、という原則と信念をもとに活動をした。今回の避難所は一見、十分な物資と環境そして様々な職種の介入により、支援が行き届いているように思えたが、利用者は生活圏が限られ寝て過ごしたり、運動不足や活動意欲低下、震災による強いストレスと慣れない環境のストレスから、身体的にも精神的にも健康レベルが低下しやすいと感じた。

私たちの災害支援ナースは看護師特有の視点と分析能力を生かし、健康状態の判断と、今後起こりうる経過と問題を予測し、どう援助すべきか、またはどういった職種に相談と介入すべきかを調整する事が大切だと感じた。

災害支援ナース活動報告書

報 告 者　：櫻井　久美子
所属施設　：新潟臨港病院
報告月日　：令和　6年　2月　10日

活 動 日	2月 5 日（月） ～ 2月 8 日（木）
活動場所	施設名　いしかわ総合スポーツセンター

活動内容

2/5　メンバー集合　自己紹介　統括リーダー決め（立候補ですぐに決まる）、全体オリエンテーション
　　シフト発表　→　当日夜勤となる為昼食後仮眠に入る。

2／5～2／6　メインアリーナ夜勤
　メインアリーナを4つのチームに分けて2名で担当（チームリーダーとなる）
　・内服確認　4名、体調確認（血圧2名、COVID19陽性者2名）
　・認知症の徘徊する方の対応
○20時、23時、2時、5時巡回
　不在の方も多くタイミングを見ながら声を掛ける
○現象を確認しながらワークシートやカルテより情報収集、またワークシートの確認と整理
○カウンターに直接訪ねてくる方の対応（担当関係なく対応、話を聴く）
○7時血圧の高い方、頭痛を訴える方の血圧測定。また介護チームからの入浴予定者のリストに沿って
　血圧測定しリストに記録
○カルテ、ワークシートに記録
＊リーダーと情報共有を行いながら活動

2／7　メインアリーナで日勤　4つに分けた1つを2名で担当）
○8時30分　夜勤者より引継ぎ（ワークシートの確認）
○9時　褥瘡のある方のシャワー浴の立ち合い（介護チームが実施）、観察と創部の洗浄
　家族に皮膚科受診の際に伝えて頂きたい事を依頼（メモを作成し、渡す）
○COVID19陽性者　同一テント内の家族2名の体調確認（体温、SPO2測定）
○感染性廃棄物ボックスが一杯のボックスの交換と運搬、物品の整理
○血糖降下剤を中断している方の情報の整理（中断の経緯など）　→　血糖上昇の症状の確認
○他エリアの認知症の徘徊する方の対応
○エリア内巡回　（11時、14時　皆さんと一緒のラジオ体操）
○保健師チームと連携し、受診や処方の依頼

2／8　7日と同様のエリアを担当　メンバー6名で担当　チームリーダーとなる
○褥瘡ケアの方法、物品の確保と準備、介護チームにシャワー浴の回数を増やせるよう情報共有
○介護チーム、DPAT、保健師など他のチームとの情報共有や連携が必要な方をリーダーに報告、共有
○感染性廃棄物の管理が煩雑な為、リーダーと共有BOXの「8割廃棄」「フタからはみ出さずにフタをする」
　など感染予防の基本的なルールを徹底してもらう

所感

・対象に配慮した支援。療養の場では無く生活の場である。この事をいつも考えて活動を行った。
　支援チーム同士、他職種やチームをリスペクトして良好なコミュニケーションを心掛けた。
　他チーム、行政など様々な組織が関わっている為、医療や生活の調整が予想以上に困難であった。
　だからこそ、リーダーを中心とした支援ナース同士、他チームとのコミュニケーションが重要である。
・タイムマネージメントこれがあってこその継続支援であると感じた。時間のけじめがあるからこそ
　情報の共有がしっかりとできた
・どんな状況であっても「住み慣れたところに戻りたい」と皆さんが話してくれた。
　支援活動を通して「望む生活ができる様生活を整える」事は看護師の役割である。という事を
　改めて教えて頂いた。

災害支援ナース活動報告書

報 告 者：三富智子
所属施設：新潟大学医歯学総合病院
報告月日：令和　6 年　2 月 15 日

活 動 日	2 月　　8 日（　木　）　～　　2 月　　11 日（　日　）
活動場所	施設名　いしかわ総合スポーツセンター

活動内容

金沢市の 1.5 次避難所であるいしかわ総合スポーツセンターでの災害支援ナースとして派遣された。前泊ホテルから 12 班支援ナースの集合場所に行く途中で、同じく新潟県から派遣となった新保さんと初対面、4 日間バディとして活動をともにする挨拶をし、緊張しながら集合場所へ向かった。派遣先へのマイクロバス 2 台にて、県庁へ向かい、点呼後に再度バス移動。
11 時頃、スポーツセンターに到着。会議室でミーティングとなった。今回の 12 班 36 名の災害支援ナースの顔合わせと自己紹介、注意事項などの確認が行われた。その中で強調されたことが、避難所は利用者さんの生活の場であること、勝手にテントに入らない。自宅であって病院ではないので、要請があった場合に訪問看護としての立場で行く。自立した生活へ戻る過程の場所なので、支援ナースが何か力になりたいという満足のために、過剰に手を出さない。被災された方の生活の場であることを改めて意識させられる注意、配慮について伝えられた。167 名の利用者さんは、生活上支援が必要な方とその家族とのことで、今後 2 次避難所や施設への入所を待つ方々が主であった。メインアリーナ以外にもサブアリーナやマルチというエリアがあって、そこはもっと介護度の高い方々が避難生活をされているということだった。

シフトが発表され、私達新潟県バディは初日夜勤、2 日目明け、3・4 日目日勤と決まった。そして、初日夜勤者 10 名の中から、私が夜勤リーダーに指名され、バディの新保さんがサブリーダーとして夜間の責任者となった。前 11 班の統括リーダーからスポーツセンター内の設備を案内された。活動場所となるメインアリーナは、250 基の仮設テントが連なる巨大な村の様だった。電気や水などのライフラインは整っており、新しく清潔感のある施設で、トイレも空調も通常の生活と変わりはなかった。入り口側の一辺が様々な職種の団体のブースとなっており、この避難所の環境や支援の行き届いたことに、これまでの自身の経験である被災地の避難所の訪問とは異なる感覚を持った。県庁、保険師、介護士、福祉士、精神、栄養士、リハビリ、ＹＭＣＡ、薬剤師、医師、2 次避難所の対応窓口、ボランティア、ＤＭＡＴ、4 日間で把握できていない職種の方もいたかもしれない位の支援の輪がそこにあった。今回の災害の大きさと、避難所におられる方々の生活を整えていくには、まだまだたくさんの援助の力が必要な災害後の時期であることを感じた。案内されながら夜勤までの仮眠室を予約、まずは昼食と休憩を取ることとなった。その時に初めて「夜勤（フロアリーダー）のマニュアル用紙」を渡されたので、目を通しながら緊張のまま、しっかり休むことはできなかったが、テント内の段ボールにマットレスを敷いたベッドが仮眠室にあり感触を経験することができた。

16：30 夜勤開始。前 11 班の支援ナースは 15 時で既に帰還しており、引継ぎは本日一緒に来

た 12 班のメンバーからの引継ぎで、17 時前に日勤者はバスで宿泊所に帰る必要があったので、15 分ほどの時間しかなく、アリーナのテントのフロアマップや、医療が必要な場合の対応、看護師が対応しているカルテなど、そこでの看護の役割や仕組みの理解が十分でないままで、10 人の夜勤が取り残されるように始まり、不安な開始となった。私は、リーダーとして朝までの利用者の方と夜勤メンバーを安全に守っていくことを念頭に全体を把握できるように努めた。メインアリーナが ABCD 4 つのブロックに分担されていたので、それぞれの担当メンバーと、フロアマップの見方、転倒歴やコロナ陽性者、ノロウィルス罹患者、徘徊、褥瘡のある方など目印による把握の仕方や情報共有をした。保健師や介護士から利用者さんの対応依頼や体調不良の相談が続き、B ブロックばかりが要請を受けたので、他のメンバーに応援を依頼し、一部のスタッフが疲弊しないように配慮しながら分担や声かけをおこなった。また、慣れない他職種への相談など、躊躇っているメンバーには一緒に付き添い、看護師の窓口としての役割を担えるようスタッフの動きや表情に目を配るように気をつけながら取り組んだ。食事、排泄、保清、歩行介助など生活のケアは介護士が主に担っていたので、看護師は内服薬の管理や介助、体調不良者や転倒時の対応などを主に担いながら施設内での役割や連携を確認しながら活動した。19：30 以降は保健師が不在となり、介護士と看護師のみの対応となった。夕方からの就寝にかけてが、体調の不安や相談事や多くあり、対応に追われることとなった。22 時に消灯、2 時間ごとに看護師が巡回するのとは別に介護士も頻回に巡回しており、夜間のケアにあたっていた。夜勤メンバーの食事休憩や仮眠の調整などをサブリーダーと一緒に相談し、過度な疲労のないよう留意した。怒涛の夜勤の始まりからの数時間で、引継ぎのフリーシートがブロックごとに一致していない、多重記載の項目があること、どのテントが稼働しているかわからない、カルテの流れの不明瞭さなど問題点や看護師の荷物の不安全さ、保健師との情報共有が少ないなど改善を望みたい点がいくつもメンバーから上がってきたため、相談の場を設け、今後の混乱を改善するためにフリーシートの書式を夜間のうちに変更したり、テントの使用、不使用や各ブロックの利用者の人数を巡回時に改めて確認したり、私達が戸惑うことは、きっと今後の支援ナースも困ることになるだろうと、数日毎に繋がっていく災害支援ナース全体の活動のしやすさのために取り組んだ。また、一生懸命になるがゆえに、何度か声が大きくなってしまうこと、ナースルームのような感覚でいるメンバーには、避難所であることを伝え、光や音量など私達が環境因子となっていることを思い出してもらった。一緒に初日夜勤の困難を乗り越え、話し合いや意見交換もたくさんしたため、12 班の中でも夜勤での 10 人のスタッフは特に仲間意識が芽生え、お互いの気づきや行動力を認め合える言葉が出た。チームとしてうまく噛み合って夜を守り、普段の夜勤明け以上の達成感の夜勤明けとなった。利用者さんとの対応では、心不全の妻を抱え死んでしまうのではないかとの心配を夫からの相談を受け、カルテと現在のご様子が変わらないことを確認しつつ、看護師がこまめに体調確認に訪問することで安心してくださった方、血圧が高く、食欲もない、体調が悪くなっているかもしれないので心配と看護師へ依頼があり話を聞いてみると、家や家族を失い、罹災証明書などこれからの手続きや書類関連の心的負担が重く、避難所の環境では、好きな趣味もできないなどのストレスを傾聴した後に少し笑顔が戻られた方など、夜間対応依頼のあった方ひとりひとり丁寧に看護師が訪問し心を寄せることで、安心や悲しみを吐き出すお手伝いができたかもしれないと思った。今回、震源地付近まで行っていないので、被害を目の当たりにはしていないが、災害が、心と身体に大きく圧し掛かっているのを感じた。

3日目、4日目は、メインアリーナの窓口相談業務を担うこととなった。リーダーと各ブロックの担当メンバーを繋いだり、他職種との連絡調整をおこなったり、各ブロックスタッフのフォロー、診察室への受診手続きの手伝いや他医療機関への搬送の調整や確認、ボード記載、仮眠室の予約代行など、円滑に12班のチーム全体が回るように取り組んだ。また、初めて一緒に働くスタッフの中で、考えの相違や言葉に傷ついたり、看護師としてどこまでやるかの考えが皆少しずつ異なるため、そこの判断のズレがあったり、行なおうとしたことを否定されたり、カルテ書類の不備や診察までの流れの不具合など円滑にはいかない場面もあり、役割上スタッフの涙や相談ごとを受けることもあった。そのスタッフの気持ちや考えをしっかり聴き、思いを受けとめ、皆が最後まで気持ちよく活動をやり遂げることができるようにアリーナ内を回りながらスタッフのSOSに対応できるように頑張った。避難所であり、病院ではない災害支援の場、スタッフもめまぐるしく変わる中なので、「普段通りにいかなくて当たり前、困ったことがあったり、足りないことなどは、気づいたところから対応しよう。臨機応変ってこういうことだよね。」と言葉にも出しながら、自分も周りもトラブル対応に苛立たないように現場の空気感を大切にしようと配慮した。初日に感じた保健師さんとの情報共有不足、ブロック分けなども異なりそれぞれ別に対応している問題などの意見が、私たちの統括リーダーを通して会議にて議題となりそれが反映され、看護師と保健師の担当ブロック分けを一致してもらうことができ、看護師の引継ぎを保健師も一緒に聞いて情報共有したり、テントへの訪問を一緒に行ったりすることができるようになり、利用者さんへの対応改善に繋げることができた。会議では、ここに介護士も加えて多職種で相談しながら対応していく方向性が話され、離れた場所の保健師、看護師ブースが近くに移転し、利用者さんの相談やケア、診察やカルテの行き来が、今後安全に円滑に行なっていけそうな改善の道を4日間の短い間に感じることができた。

最終日の前にスタッフ間で、命を災害の場から助ける時期は終わり、今は生き延びた人の健康を守っていく時期、避難所での生活から災害関連死を出さないために看護師が何ができるかという話題となった。やはり、要介護や要支援の方々の避難所での生活は、不活発な傾向になってしまっていた。いくら1日2回ラジオ体操があっても365歩のマーチが流れてもそれ以外をテントの狭い中やアリーナのフリースペースの椅子で過ごしていては、深部静脈血栓症（DVT）の予防は難しい。実際にこの避難所から病院へ搬送された利用者さんは、DVTの方が多いようだった。看護師として、フットケアをしていこうとの気運が高まり、4日目は各ブロックのスタッフがそれぞれ足浴やフットケアをして回り、看護師による足の観察、浮腫み予防、保清、爪切り、保湿、靴下での保護、が実践された。私は、ケアが多くの利用者さんへ行き届くように、台車でのお湯汲みや交換、靴下や衣服の調達などの裏方として参加した。ケアで関わっていく中で、今まで1回も更衣をしたことがない利用者さんが見つかったり、皆の笑顔を引き出せたり、看護の力強さとスタッフの嬉しそうな表情を感じながらチームの一員として取り組んだ。午後から来た13班の新しい支援ナース達が戸惑わないように、午後は各役割のスタッフがそれぞれ説明や引継ぎ、フットケアも一緒に行ったりして、利用者さんに切れ目のない看護が提供されるように最後まで皆一丸となって活動した。4日目、最終日は15時で終了。皆バスに乗りながら、後1、2日くらい続けたかったね、やっと全体が掴めたし、DVT予防とフットケアという看護師の方向性も見えてきたところで、全員の足洗いたかったね、など話しながら活動を終えた。12班の36名の災害支援ナースとしてのたった4日間の出会い、自発的に動く看護の力と、みんなが役割を全うすることができたチーム力を口々に言い、良い仲間に恵まれ良い刺激を受

けたと感じながら金沢駅で解散。それぞれ支援ナースの表情は、不安で強張っていた 4 日目と違い達成感のある笑顔だった。災害はおきてほしくないことではあるが、全国に同じように災害時に誰かの力になりたいと思って準備している看護師たちを一緒に働くことができたこの派遣の機会に感謝の思いをもった。

所　感

・1.5 次避難所という場が初めてだったので、震源地近くではなく施設の整っていること、テントという周りの眼からプライバシーを守れる場、そして支援するための組織や多職種が一堂に揃っていることなど、被災者の方々にとってとても恵まれた環境かもしれないと最初は感じたが、いくら支援の輪や物資が満ち足りていても、常に周りにガヤガヤと様々な人がいること、テント内の狭さ、支援のために来た人々の視線に常にさらされてしまっている状況であることなど、親しんだ土地や落ち着ける家で過ごせない、支援の受け身にならざるを得ない被災された方々の悲しさ、避難所という場の限界を感じた。

・「帰りたくても家は流されて帰れない。私は外に連れ出されて助かったけど、家にいた周りの友達はみんな流されちゃった。」ラジオ体操を一緒にしながら話された方。「どこから来たの？遠くからみんなありがとうね。感謝しかないわ。生かされたから頑張るわね。」と笑顔で接してくださった。私たちにむけてくれる感謝の言葉や笑顔がとても切なく苦しい気持ちになった。私は手を握りながら「新潟です。中越地震の時には、私たちも全国の方々から力をもらいました。お互い様です。みんな一緒です。」なんとか心を軽くしたいと思って話しても災害や被害、生活への影響を考えると、無力さを感じ笑顔の奥の辛い気持ちで落ち込んでしまいそうだったが、看護師という仕事を通して、被災された方々の役に立つことができる支援ナースの役割の意義も同時に感じた。

・今回、支援に行った私たちの環境もとても整っていた。ライフライン問題なく、宿泊所つき、入浴もでき、夜勤中には仮眠室もある、防寒グッズも必要ない、災害支援でありながら通常の生活の延長上で活動できたことは恵まれたことだったと感じている。また、一方で一緒に行った支援ナース達と話していたのが、被災地近くの病院施設などの支援はまだまだ必要なのではないか、被災しながら働いている看護師を休ませてあげたい、そうした気持ちを共有した。単独では行けない派遣されることが前提の私達の活動だが、いつ誰がどこで被災することとなるかわからない。その時に、被災された看護師達の力や支えになっていきたいという思いが強く浮かんできた。今回様々な地から集まった看護師が「お互い様だよね」「現地の看護師のことが心配だよね」と話した。

・4 日間、非常に気を張りながら頭もフル回転しながら災害支援ナースの経験をさせていただいた。色々なことを感じ、考えることとなったので、報告書もまとまらないものとなってしまったが、災害時の看護師の在り方や心の動き、被災者の方々への思いや対応、同じく派遣されてきた短い期間の支援ナースの仲間、この経験から得るものはとても大きく今後のために貴重な機会となったと思う。今回出会った情熱を持った支援ナースの仲間が、どこかで頑張っていると思うと、自分も頑張っていこうと思え勇気をもらったように感じている。今回の支援ナースの活動に快く後押ししてくれた職場の仲間や家族、そして準備から物品、様々な連絡調整など多岐にわたって支えてくださった看護協会の皆様のおかげで、円滑に活動に取り組むことができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

新潟県看護協会　e-mail： saigai-shien@niigata-kango.com

災害看護支援ナース活動報告書

報告者:　新保　憲一
所属施設:　新潟県立柿崎病院
報告月日:　令和6年2月12日

活動日	令和6年2月8日（木）～2月11日（日）
活動場所	いしかわ総合スポーツセンター

活動内容

2月8日

10:00金沢駅集合　10:30現地到着　全体オリエンテーション　その後夜勤の為14:30より仮眠室で仮眠　16:30夜勤申し送り　V/S測定、服薬確認　内服介助など　22:00消灯　夜間巡視23時　1時　3時　5時　7時　マニュアルの見直しなど

2月9日

8:30申し送り　9:00送迎バスでホテルへ

2月10日

8:10送迎バスで避難所へ　8:30申し送り　V/S測定　転倒対応　有熱者の診察手続き　処方依頼　記録　ワークシート入力　16:30申し送り　17:00送迎バスでホテルへ

2月11日

8:20送迎バスで避難所へ　8:30申し送り　V/S測定　フットケア　記録　ワークシート入力　フットケア対象者ファイル作成　14:30申し送り　15:00送迎バスで金沢駅へ

所　感

派遣される前の緊張と不安、数日間で入れ替わるスタッフ、ままならない引継ぎやオリエンテーション、到着その日に指示される夜勤勤務、利用者の生活の中から見えてくる様々な問題利用者とかかわる中で感じる無力感など、いろいろと考えさせられ、たくさん経験を積ませてもらった。今までの災害派遣されたスタッフたちが築いたものはこの状況の中で大変な労力で作り上げられたものであったが、それでも現場はまだ混乱している状況であった。

そういった中でも、集まったスタッフたちが自分の培ってきた看護の力を発揮し、熱意をもって利用者にかかわっていく姿に大いに刺激を受けた。利用者の為を一番に考え、自分たちに何ができるのかを考え、問題を見つけ、取り組んでいくことができた。自分が関わったフットケアで利用者に喜んでもらえたことは、今回の災害派遣の意味を見出したように思う。

他県の災害支援ナースと交流を深められたことも良い思い出となった。

今後も派遣要請が来た時には、今回の経験を踏まえ前向きに検討したいと思う。